

思考力・判断力・表現力等の育成を目指す 高等学校古典（古文）の指導法の研究

本 間 瑞 樹¹

高等学校古典（古文）においても、「思考力・判断力・表現力等の育成」が喫緊の課題の一つとなっている。そこで、本研究では、「互いの考えを伝え合う」という言語活動を通して指導することが、これらの力の育成に有効であると考えた。ワークシート等を活用した指導を行いながら、まず、作者の考えについて意見交流させ、さらに、時代の異なる文章を読み比べ、批評文を書かせ交流させた結果、これらの力の高まりが認められた。

はじめに

急速にグローバル化し、複雑化する、21世紀の世界を生きていく高校生にとって、古典を学ぶことの意義は大きい。古典には、長い歴史の中で育まれてきた日本人のものの考え方、感じ方、生き方等が含まれている。これらを読み、「自分という存在は、何によって成り立ち、そして、どのような存在なのか」ということを、高校生自らが考察することは、彼らに他者の存在をも意識させ、自己を相対化して捉えさせることにつながる。そして、このことが、彼らのアイデンティティの形成を促す契機の一つともなると考える。

しかし、高校生が、古典の内容を深く読み取り、古典を学ぶ意義を十分知り得ているとは言い難い。彼らの多くが、文法等の知識習得と、学習教材の内容を深く読み取ることを、効果的に結び付けられずにいる。その結果、彼らは、古典を学習することに抵抗感を有したり、意義を見出せないでいる。

そのような状況の下で、平成20年1月17日に出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(中央教育審議会答申 2008)において、児童・生徒の「知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等」の育成が喫緊の課題の一つとして示された。

この答申の趣旨に添えば、高校生に、古典を学ぶ意義を実感させるとともに、文法習得等に対する抵抗感を低減し、古典における思考力・判断力・表現力等の育成を目指すことが、高等学校国語科に求められていると言える。

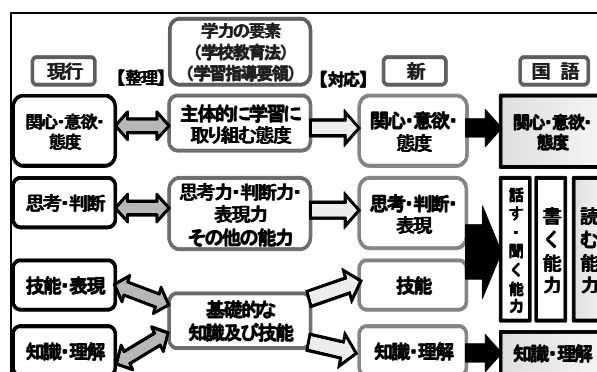
そこで、生徒自身が、様々な経験と、既習の知識を活用しながら、主体的に考察したり、表現したりする言語活動を取り入れ、古典における思考力・判断力・表現力等の育成を目指す指導法を研究した。

研究の内容

1 研究テーマの設定の背景

(1) 高等学校古典における「思考力・判断力・表現力等」

平成21年3月に新しい高等学校学習指導要領(以下、新高等学校学習指導要領)が告示された。このことに関連して、西辻(2011)は、「新しい評価の観点は、学力の要素、新学習指導要領の趣旨や内容等を踏まえて、図のように考え方を整理し設定された。」としている。その図は、第1図のとおりである(西辻 2011、一部表示を改めた)。



第1図 学力の要素と評価の観点との整理イメージ

高等学校古典の評価の観点は、「関心・意欲・態度」「読む能力」「知識・理解」の三観点となっており、第1図を踏まえれば、「読む能力」の育成が、高等学校古典における思考力・判断力・表現力等の育成と密接につながっている。

(2) 高等学校古典（古文）における指導法の課題

これまでの、自らの古典(以下、古文と同義)の授業実践を振り返ると、文法知識等の習得指導と、そのための解説に重点を置いていたことは否めない。

しかし、生徒は、文法の知識を効果的にいかしきれず、「関心・意欲の喚起」も不十分であったため、古典における「読む能力」の育成までには、なかなか至らなかった。

古典における「読む能力」の育成は、文法知識の習得のみで達成されるものではない。学習教材の「内容

1 神奈川県立横浜栄高等学校
研究分野(授業改善推進研究 国語)

を読み取ること」(本研究においては、「単に現代語訳をすることに止まらず、古典に表れた作者等の、ものの方、考え方、感じ方を読み取り、人間等について考察すること。」を指す。)ができるようになるためには、古典に対する「関心・意欲の喚起」と「文法知識の習得・活用」が、いわば「車の両輪」と考える。

そこで、新たな指導法の研究に取り組んだ。

2 研究の構想とその概要

(1) 「古典A」の準用

本研究は、後述する所属校の生徒の実態を踏まえ、新高等学校学習指導要領国語科における「古典A」を準用した。「高等学校学習指導要領解説国語編」(2010)における「古典A」の「目標」は、以下のとおりである。

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

(2) 単元の構想

一つの単元を構想するときの留意点とその過程については、『言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫』(独立行政法人教員研修センター 2010)において、以下のように示されている。

- ① 児童生徒に身に付けさせたい能力や態度(単元の目標)を設定する。
→ 学習指導要領の内容(指導事項)。
- ② ①にふさわしい学習活動(言語活動や体験活動等)を取り上げる。
→ ②を通して①を指導する。
- ③ ①, ②にふさわしい教材や題材などを選定する。

本研究においては、これを踏まえ、「古典A」の「指導事項ア」を、「生徒に身に付けさせたい能力や態度」とした。「指導事項ア」は、以下のとおりである。

ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。

これを基に、本単元における評価規準を設定した(第1表)。

第1表 本単元における評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
古典に表れた思想等を読み、自己と古典の関係性に気付こうと	古典に表れた思想等を読み、自己と古典の関係性に気付く。	文や文章、語句等について、その特徴等を理解し、知識を身に付けている。

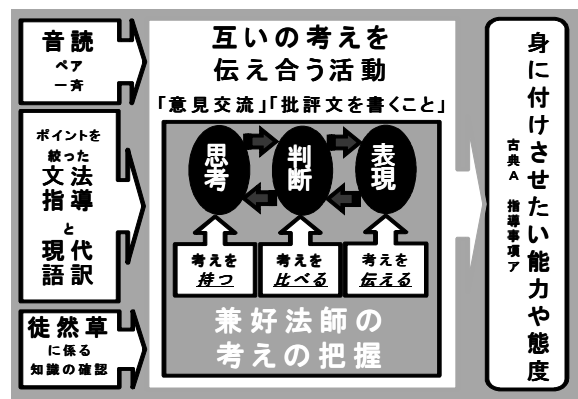
本研究における、「読む能力」の評価規準の設定については、所属校生徒の実態を踏まえ、古典に対する「関心・意欲の喚起」を図るとともに、習得した知識を活用して「読む能力」の育成を目指した。

そして、単元の「目標」を実現するのにふさわしい言語活動として、「互いの考えを伝え合う」という言語

活動を取り上げた。具体的には、「意見交流」と「批評文を書くこと」である。他者との「意見交流」と「批評文を書くこと」は、古典の内容を深く読み取ることにつながり、古典における「読む能力」が高められていくと考えたからである。

次に、学習教材として、『徒然草』第十二段を選定した。この章段は、兼好法師の「友情」観が書かれたものとして、よく知られている。生徒にとって、時代は異なっても、「友情」をめぐる話題は、自己に引き付けて考えることが容易なものであり、彼らの古典に対する「関心・意欲」を喚起できると考えた。自己に引き付けて考えることの容易さが、兼好法師の考えを把握することにもつながるという見通しもあった。

これらの単元の構想過程を踏まえ、以下の単元の学習イメージ図を作成した(第2図)。



第2図 単元の学習イメージ図

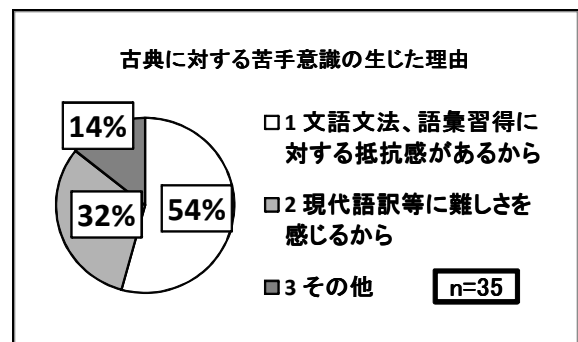
3 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間 平成23年10月3日～10月14日
対象生徒 神奈川県立横浜栄高等学校 第2学年 古典 3クラス(82名)
授業時数 6時間
単元名 『徒然草』第十二段を読む。

(2) 所属校における生徒の実態

所属校において、古典に対する苦手意識を持つ生徒に、その理由を尋ねたところ、文法や語彙習得に対する抵抗感を有する生徒の割合が54%、また、現代語訳等を行うことに抵抗感を有する生徒の割合が32%を占めていた(第3図)。



第3図 検証授業前のアンケート

(3) 古典（古文）学習における指導法の工夫

ア 生徒の実態を踏まえた指導の工夫

渡辺（2005）は、古典の学習指導について、解決しなければならない諸問題があることを指摘し、その一つとして「言語抵抗」を挙げている。それは、換言すれば、「古典を読む上で付きまとう言語そのものへの抵抗感」と言える。これを払拭するために、渡辺は、「訓詁注釈、通釈、古語（語彙）、古典文法の指導」に力が注がれてきたと述べる一方で、「それらの指導の多くは、古典の内容に関する学習者の興味・関心や問題意識とは別に、しばしば形式的になされ、学習者から古典を遠いものにした。」と指摘している。

前述の所属校におけるアンケート調査結果を踏まえれば、生徒は、古典の内容を読み取る前段階で、既に立ち止まっていたり、戸惑ったりしている。

本研究では、文法の指導は、既習事項の確認にとどめ、現代語訳については、キーワードを意識させつつ、兼好法師の考えを的確に捉えさせることに重点を置いた。そして、学習教材の内容と自己の関係性を考察することに組み合わせた。

イ 兼好法師の考えについての「意見交流」

兼好法師の考えに対して、共感したり、違和感を持ったりしたことを足掛かりとして、そのように感じた理由を含め、自己の考えをワークシートに記述し、「意見交流」をさせた。他者との「意見交流」によって、生徒は、自己の世界にとどまらず、違った視点を手にすることになる。また、他者との「意見交流」は、自己のこれまでの在り方を確認したり、自己の考え方を広げたり、深めていくことになる。この活動は、生徒のアイデンティティの形成を促す、一つの契機にもなると考える。

「意見交流」を行うにあたっては、最初に「個」のレベルでの考察を促す時間を設定した。そこで、自己の考えを整理した上で「意見交流」に臨み、再度、「個」に戻り、自己の考えを振り返り、再認識するような場面を設定した。この一連の活動によって、兼好法師の考えを捉え、自己の読みが広げられていくと考えた。

ウ 時代の異なる「友情」をめぐる文章との読み比べ

新高等学校学習指導要領の「古典A」の言語活動例ウに、次の活動が示されている。

ウ 図書館を利用して古典などを読み比べ、そこに描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。

この活動例を参考に、本研究では、古典にとどまらず、時代の異なる「友情」をめぐる文章を用いて読み比べを行った。これは、兼好法師の「友情」観に対する、生徒の興味・関心を喚起するとともに、その「友情」観を、より深く読み取るための手立てとしたもの

である。

併せて、長い歴史の中において、古典や現代文の中に描かれた「友情」観を知ることにより、再度、兼好法師の「友情」観を、自己のそれに引き付けて考察させることを目指した。

エ ワークシートの工夫

「意見交流」と「批評文を書くこと」を行う上で、ワークシートを活用した。第2、3時においては、「生徒自身が自らの考えをまとめる」ために、第3時においては、「他者の考えを記録する」ために、第4、5時においては、「自己の考えを振り返りまとめる」ためである。このことにより、自己の思考の変遷を確認できるように工夫した。

同時に、繰り返し、生徒が自己の考えをワークシートに記述していくことにより、自己の考えを深めていくこともねらいとした。

また、毎時間の「学習目標」を明示することを心掛けた。「この単元の学習目標は何か」、「この時間の学習目標は何か」ということを明確にすることで、生徒に学習の見通しを持たせ、より主体的な学習活動を促すことを目指した。

(4) 単元の学習指導計画

指導計画は全6時間で、次のとおりである(第2表)。

第2表 指導計画

次	時	主たる学習活動	評価の観点
1	1	<ul style="list-style-type: none"> 『徒然草』第十二段前半を音読する。 基本的な文法事項及び古語を確認する。 現代語訳に取り組み、内容を確認する。 	知識・理解
2	2	<ul style="list-style-type: none"> 兼好法師の「友情」観を確認する。 兼好法師の「友情」観に対する自己の考えを、ワークシートに記入する。 数名の生徒から「意見」の発表を聴く。 	読む能力
	3	<ul style="list-style-type: none"> 自己の書いた「意見」文を基に、グループ内で意見交流する。 新たな発見や深まった自己の考え等をワークシートにまとめる。 数名の生徒から「意見」の発表を聴く。 	読む能力
	4	<ul style="list-style-type: none"> 「友情」観をめぐる参考文四題を読み、いずれか一つを選択し、第十二段前半と結び付けて、兼好法師の「友情」観について、「批評」文を書く。 	読む能力

2	5	<ul style="list-style-type: none"> ・「批評」文を、他のグループで回し読みし、付箋紙に書き手への質問等を書く。 ・質問等が書き込まれた付箋紙を読み、兼好法師の「友情」観と自己の「友情」観のそれぞれについて考えたことを振り返る。 	読む能力
3	6	<ul style="list-style-type: none"> ・第十二段後半について、その概略を学ぶ。 ・『徒然草』、兼好法師とその生きた時代について、資料を使って概観する。 ・ワークシートに、兼好法師の考えと自己の考えの関係性を踏まえながら、振り返りを書く。 	関心・意欲・態度

(5) 検証授業の具体

【第1次・第1時】

ペアによる音読をしっかりと行わせた上で、既習の文語文法を確認し、重要古語の語義を確認させた。そして、本文の現代語訳に取り組み、最後に授業者が内容を確認した。この時間の取組みが、この後の「意見交流」「批評文を書く」といった言語活動の基礎になることを意識させ、兼好法師の「友情」観の把握に重点を置いた指導を行った。

【第2次・第2時】

兼好法師の「友情」観に対して、共感したり、違和感を持ったりしたことを足掛かりとして、そう感じた理由を含めて、自己の考えをワークシートに記述させた。

【第2次・第3時】

4人を基本としたグループを編成し、「意見」文をそのグループ内で伝えるという交流活動を行った。そして、他者の考えを知ることによって、新たに気付いたことや、自己の考えの深まり等をワークシートに記述させた。

【第2次・第4時】

時代が異なる「友情」をめぐる文章四題（第3表）を読み比べ、その中から一つを選択した上で、「批評文」を書かせた。これは、兼好法師の「友情」観を違った視点から確認するためのものである。

第3表 「友情」観をめぐる参考文四題

【古文】	『徒然草』 第百十七段 (現代語訳付き)
【漢文】	『論語』 第十六 季氏篇 (現代語訳付き)
【現代文】	「全国高校生の主張」より一編
【現代文】	北野武 『全思考』より (抜粋)

【第2次・第5時】

前時に書いた「批評」文を、他グループの生徒に読ませた。そして、付箋紙に質問や評価を記入させ、最終的に書き手の手元に戻すこととした。

次いで、書き手に付箋紙の記述を読ませ、自己の「友情」観とともに、兼好法師の「友情」観を振り返らせた。

【第3次・第6時】

第十二段後半の概略説明と合わせ、『徒然草』と兼好法師について、指導者作成資料を用いて概観させた。

本単元のまとめが、次の新しい単元の学びへとつながっていく。同時代の、あるいは、同ジャンルの古典を学習した際に、『徒然草』やその作者についての知識が発展的につながっていくことが重要である。

(6) 検証授業の結果考察

生徒のワークシート及び授業後のアンケートの記述から、「互いの考えを伝え合う」という言語活動を取り入れた指導法の工夫が、古典における「読む能力」の育成を目指す上で、有効であったかどうかについて、検証授業の結果を、ア～カのとおり、考察した。特に注目した部分には、下線を施した。また、生徒の記述は、そのまま記載した。

ア 評価規準「読む能力」の評価結果

本単元における「読む能力」の評価規準は、「古典に表れた思想等を読み、自己と古典の関係性に気付く」である。これに基づき、ワークシートの記述内容の分析から評価を行った。その結果、「おおむね満足できる状況」のB段階以上に到達している生徒が、95%であった。「互いの考えを伝え合う」という言語活動は、生徒の「読む能力」を育成する上で、効果的であったといえる。

イ 本単元における「読む能力」の高まり

生徒Aのワークシートの記述から、本単元における「読む能力」の高まりを追った（第4表）。他の生徒にも、同様の記述内容が見られたが、生徒Aの記述を、代表例として取り上げた。

第4表 生徒Aの「読む能力」の高まり

ワークシート	生徒Aの記述
ワークシート ③より (第2時)	<p>本文にある「ひとりある心地やせん」に違和感を持った。</p> <p>【理由】相手に合わそうとすることがあっても、共通の話題で楽しめたりすることがあるから、<u>ひとりである気分にはならない。</u></p>
ワークシート ⑤より (第3時)	<p>【自己の意見】もともと他人に自分のすべてが分かるはずはないし、そういう意味では、気が合う人はいません。また、<u>相手に気をつかって話しているといっても、一つでも共通の話題があれば楽しめるので、一人でいる気分になる、というのには同意しにくいです。</u></p>

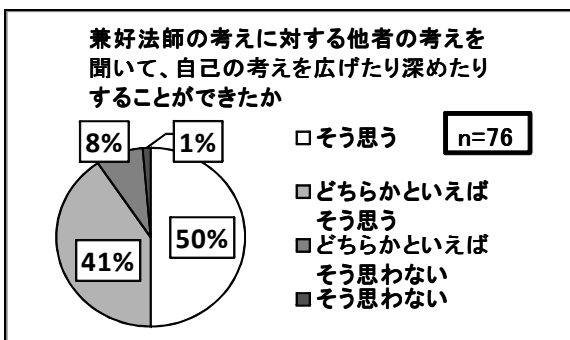
ワークシート⑦より(第5時)	<p>【振り返り】友達の考えを知り、賛成できないと思っていたところも賛成できるという意見に少し変わったところがありました。自己の意見だけにとらわれず、新しい意見を聞くことで、新しい発想などが思いついてよかったです。</p>
----------------	---

第2時の記述からは、生徒Aが自己の経験を基に、兼好法師の「友情」観に違和感を持っていることが読み取れる。第3時の記述からは、第2時と同様、兼好法師の「友情」観に違和感を持っていることが分かるが、より明確に自分の考えの根拠を述べている。第5時の記述からは、意見交流により、考えに変化があったことが読み取れる。

「互いの考えを伝え合う」という言語活動を繰り返すことによって、生徒Aが兼好法師の「友情」観を、自分に引き付けて考えていった様子が見て取れる。

ウ 「意見交流」を取り入れた学習形態

「意見交流」という言語活動が、「読む能力」の育成に有効であったかを考察した。検証授業後のアンケートにおける「兼好法師の考えに対する他者の考えを聞いて、自己の考えを広げたり深めたりすることができたか」という問いに対して、肯定的に回答した生徒が、91%であった(第4図)。



第4図 検証授業後のアンケート1

また、事後アンケート自由記述欄には、次に示す生徒B、Cのような記述が見られた。これらの記述からは、「意見交流」によって、自分の考えが揺さぶられたり、兼好法師の考えについて、より広がりをもって考えることができたということが分かる。

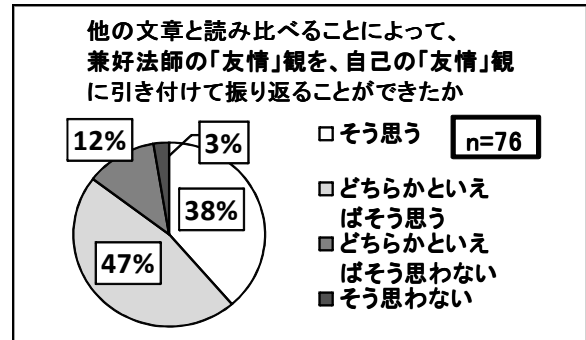
<p>(生徒B) 友達の意見や自分の意見を、すごく考えて、自分がどう思うのか、兼好法師はなぜこのように考えたかなど、いろいろ考えさせられて、すごく楽しかったです。ありがとうございました。</p> <p>(生徒C) 今回「徒然草」で、いろいろな人と話し合ったりすることで、作者の思いや伝えたかったことも分かりました。これからも、語訳の後に作者の気持ちも考えながら、読んでいきたいです。</p>

以上のことから、「意見交流」は、「読む能力」の

育成に有効であることが分かった。

エ 「読み比べ」と「批評文を書くこと」

「読み比べ」と「批評文を書くこと」という学習活動が、「読む能力」の育成に有効であったかを考察した。検証授業後のアンケートにおける「他の文章と読み比べることによって、兼好法師の『友情』観を、自己の『友情』観に引き付けて振り返ることができたか」という問いに対して、肯定的に回答した生徒が、85%であった(第5図)。



第5図 検証授業後のアンケート2

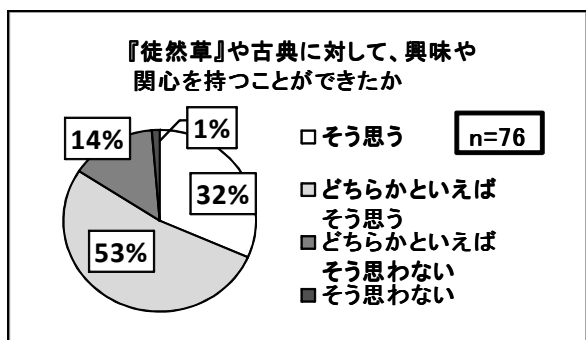
次に、生徒Dが、第4時に取り組んだワークシートの記述から、時代の異なる「友情」をめぐる文章を用いて、批評文を書くことに取り組んだ結果を検討した。

<p>兼好法師の「友情観」とは、どのようなものであろうか。それは、「自分と気が合う人など、めったにいない」という考えである。<u>その考えに、私は賛成できない。</u></p> <p>高校生の市川さんは、「100%で伝えたら、100%で返ってくる、そんな子がいる。」と書いている。多くはないが、私にもそのような友達がいる。したがって、私は兼好法師の「友情観」を受け入れることはできない。</p>

生徒Dは、兼好法師の考えと自己の考えを突き合わせることによって、考察を深めており、兼好法師の「友情」観に同調することはなかったが、参考文献の一節を、自己の考えの補強材料として用いて、結論を導き出していた。

オ 「関心・意欲の喚起」

検証授業後のアンケートにおいて、『徒然草』や古典に対して、85%の生徒が、興味や関心を持ち、肯定的な実感を有していた(第6図)。



第6図 検証授業後のアンケート3

また、本単元における「関心・意欲・態度」の評価規準に基づき、評価を行ったところ、89%の生徒が、「おおむね満足できる状況」のB段階以上に到達しており、アンケート結果ともほぼ合致していた。

以上のことから、「互いの考えを伝え合う」という言語活動が、生徒の「関心・意欲」を喚起する上でも、効果があったことが認められた。

カ ワークシートの工夫

事後アンケート「今回の授業を通して、どのような力が身に付いたと思いますか」という記述欄には、次に示す生徒Eのような記述が見られた。この記述からは、「ワークシートの工夫」によって、生徒が、繰り返し、それに記述することにより、自己の考えを深めながら、兼好法師の考えを追究しつつ、考察していった様子がかがえた。

(生徒E) こんなに理由をおって自分の意見を書いたのは久しぶりの気がします

また、生徒Fの事後アンケート自由記述欄から、「学習目標の明示」についても検討した。

(生徒F) 毎回“学習目標”があって、その日に何をやるかが明確だったので、授業が受けやすかった。

「学習目標」を、毎時間の最初に明示したことによって、学習の見通しを持たせることができた結果、生徒Fは、学習に対する肯定的な実感を持ち得ていたことが分かった。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本研究の成果を二点挙げておく。

一点目は、「互いの考えを伝え合う」という言語活動を取り入れた指導法の工夫が、古典における「読む能力」と密接につながる「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す上で、有効であること。

二点目は、この指導法の工夫が、生徒の、古典に対する「関心・意欲の喚起」を促すことである。

(2) 今後の課題

本研究は、古典における「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指す上では、一定程度、成果があったものの、「読むこと」の領域の一部の育成にとどまった。さらに、生徒の、古典に対する関心・意欲の喚起を、学習教材の内容を深く読み取ることに、どのようにして結び付けていくかが、課題として残った。

また、他者との交流や、自己の意見を表明すること、抵抗感等を有している生徒が存在していることも事実である。このような生徒の抵抗感等を、いかに低減するかということも課題である。「互いの考えを伝え合う」活動は、義務教育段階からの、言語活動を支える言語能力の育成によるところが大きい。義務教育段階からの取組みを継承することによって、その抵抗感

を、ある程度は低減できるかもしれないが、学校内で安心して「意見交流」ができる環境作りや、生徒が互いを尊重した「意見交流」ができるような学習教材の開発及び学習指導の工夫が必要である。

一方、生徒の状況等によっては、古典の原文の内容を読み取る力の育成までが求められる場合がある。そこで、授業者が、現代語訳や文法指導に偏った授業に陥ることなく、「関心・意欲の喚起」と「基礎的・基本的な知識の習得と活用」を土台として、古典における「思考力・判断力・表現力等の育成」を図ることができれば、おのずと、多様な生徒のニーズにも応えることができ、「古典A」の「目標」にあるような、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成にまで到達することができるはずである。

これらのことから、中学校からの学習の連続性、系統性を踏まえ、高等学校の1年間、あるいは卒業までを見通しつつ、単元の指導内容等を吟味し、生徒の発達段階に応じて、指導事項をバランスよく配置した、学習指導計画の作成が必要であることを改めて感じた。

おわりに

古典(古文)の学習において、「単元の目標」、「単元の評価規準」を設定した上で、兼好法師の考えについて、「互いの考えを伝え合う」という言語活動を行わせた。この結果、生徒の古典における「読む能力」と密接につながる「思考力・判断力・表現力等」の高まりが認められた。また、本研究の指導法によって、生徒の古典に対する「関心・意欲」を喚起することも分かった。

「古典の授業で、友情観について、こんなに深く考えることができると思っていなかったのも、おもしろかったです。」という、ある生徒の言葉を励みに、授業改善を進めながら、さらに研究を続けていきたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2011. 11. 1 取得)) p. 24
- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版 p. 64
- 独立行政法人教員研修センター 2010 『言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫』 p. 77
- 西辻正剛 2011 「高等学校国語の指導の改善(30)」(中等教育資料8月号) ぎょうせい p. 69
- 渡辺春美 2005 「六 古典の学習指導」(倉澤栄吉・野地潤家監修『朝倉国語教育講座2 読むことの教育』朝倉書店) p. 138